

2014 年度世界ジュニア・サブジュニア パワーリフティング選手権大会 平成 26 年 9 月 1-6 日 ハンガリー・Óroszaya 報告、写真：国士舘高等学校 パワーリフティング部 顧問 中谷 幸市

平成 26 年 9 月 11 日記

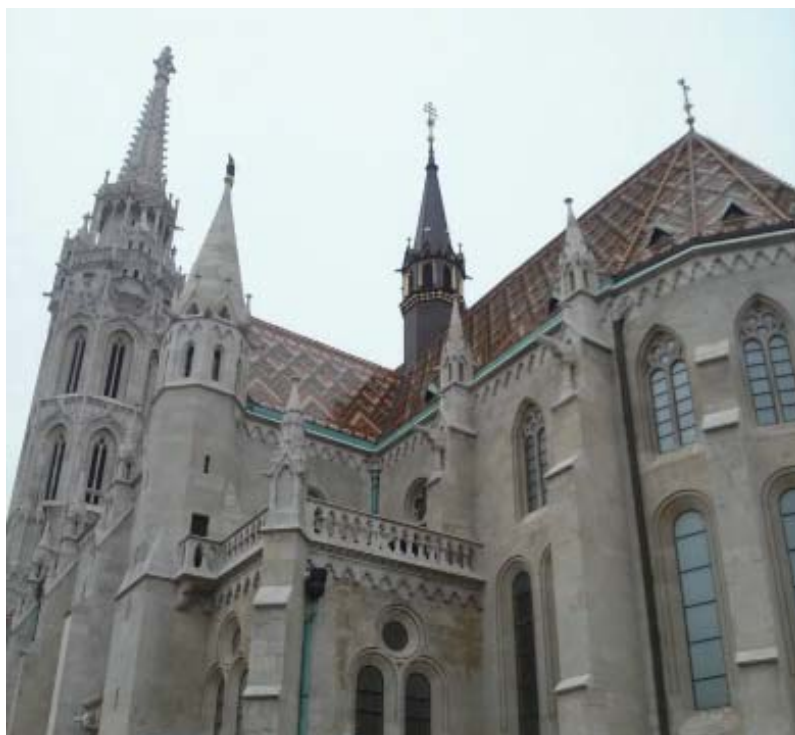
今回この大会の参加に関しては、本校の吉村（サブジュニア男子 120kg 級）が何とか選考してもらい、その引率・セコンドに加えて、IPF に審判員としての協力を第一に考えた。

何故なら、IPF ルール上、各国の選手団からレフリーを出さなければ、団体戦は上位 4 名の加算だけになってしまう（レフリーを出せば上位 5 名の加算）ので随分不利を被る。

また、いつも IPF 会長のガストンから「日本は選手をたくさん出すが、いつも審判役員協力をしない！」と嫌味を言われ続けている。

私は、選手団の成功と IPF に（特にガストンに）役員協力している日本をアピールしたかったのである。

当のガストンは自分の仕事の関係でテクニカルミーティングと開会セレモニー参加だけで早々に引き揚げてしまった。（握手して挨拶だけはした。）



ハンガリーの町、協会は美しかった。



日本選手団はサブジュニア総勢 17 名（女子 8 名，男子 9 名）・ジュニア総勢 17 名（女子 8 名，男子 9 名）のフルエントリーである。

三浦重則団長（京都学園大 PL 部監督・JPA 理事）から、成田出発前の結団式では、全選手の試合の好結果と事故なく全選手が無事帰国することを第一とすると強調されていた。

結果的には最後の夜、選手たちの頑張り・団体行動の秩序をほぼ守ったということのご褒美として、『ドナウの真珠』（夜景）を観に行くときに足首を捻った選手が一人出ただけで無事帰国できた。

6 日間に亘る大会は、大いに盛り上がり、時には朝 6 時半コスチュームチェックから夜 10 時頃に至るような熱戦が続いた。

日本チームは 2 年前に参加したポーランド大会と同様、本当にチームワークが良く、一人の選手をみんなで声を出し合って応援し、セコンド陣は事細かく選手のために働き、私には世界一の統制のとれたチームだと感じた。（身内最良ではなく）

また、若い選手がアップ場、観客席を健気に飛び回るさまに感銘さえ受けた。

その甲斐があって、サブジュニアでは男女とも団体戦は 3 位で、ジュニアでは女子 4 位で男子は 7 位（上位が臨めた 2 人の失格が痛い。これがなければ 3、4 つ上に上がったはず。）

個人戦サブジュニア女子では、43kg 級清水優里奈選手（草加高校）がトータル銅メダル、72kg 級の窓場加津紗選手（京都学園大学）が S：銀，B：銀，D：銅，トータルの銅メダル



往年の選手、ジーンベルの息子 Ian のデッドリフト、ジュニア 9 3 kg 級、365.5kg（世界新記録）を見つめる観客達。



サブジュニア男子では、59kg級佐竹優典選手（春日部共栄高校）がS：ワールドレコードの235kgで金，B：銅，D：金，トータルがワールドレコード600kgの金メダル。

66kg級の木内陽介選手（春日部共栄高校）が3種目オール金のトータルが667.5kgの金メダル。

120kg級坂口諒丞選手（豊川高校）がS：290kg銅，B：170kg銅，D：287.5kg金，トータル747.5kgの銅メダル。

国士館高校の吉村 優選手（国士館高校）初出場で緊張のせいなのかスクワットとデッドで調子に乗れず

トータル605kgの5位で高校最後の試合を終えた。

快挙となった春日部共栄高校の木内選手、佐竹選手はベストリフターの2位、3位であったが、木内選手のデッドの第3試技262.5kgを完璧に引き「ダウン」のコールの0.3秒前にグリップが外れてしまった…。

本当に惜しい試技でこれが成功であれば、アメリカのマイケルを抜いて1位だった！

ジュニア女子では、43kg級常連 根本 梢選手（km国際自動車株式会社）がS：銅，B：銅，D：銀，トータルの銅メダル，47kg級佐竹優佳選手（東洋大学）がD：銅でトータル4位，52kg級有本美沙紀選手がB：金でトータル6位

ジュニア男子では、53kg級森脇滉人選手（岡山大学）がS：銅でトータル6位。

59kg級 常連 池上宏樹選手がまさかのスクワットしゃがみの高さが平行と採られて失格してしまったが、B：銀，D：銅でトータルのメダル圏内だったのでスクワットの失敗は悔やまれた。

83kg級村野知永選手（本校出身阪南大学）は検量79.8と高校3年の一番強かった時より6kgほど落ちてトータルも50kg下がり大変残念であった。



私は2回のサイドレフリーと2回のテクニカルコントローラー (TC) の役員をさせていただいたが、2回目の男子74kg級 TC の際、このクラスの人数が多いため3グループに分けて試合が始まり、途中中断も入って終了したのは正に5時間後だった。この間ずっと立ちっぱなしで足はパンパンに浮腫みほとほと疲れた…。

しかし、表彰セレモニーのオールリフターの引率を終えた後、IPF 技術委員長の南アフリカのスマスから「Good job !」とねぎらいの言葉を貰ったので、ほっとした。

審判員のカルディア ナガタ (ブラジル) この人は祖父が日本人らしい、エヴァ メイヤー (ハンガリー)、アルバート フォミン (ロシア)、ワーナー ルー (ルクセンブルグ)、ロバート ケラー (アメリカ) の方々と親交を深められた。

特に2回一緒にサイドレフリーをしたエヴァ メイヤー (ハンガリー) さんは、私が友好の証に東京オリンピックのバッジをあげれば、次の日に大会記念Tシャツを持って来てプレゼントしてくれた！ 彼女はハンガリー協会重責の役員らしい。

さよならパーティーでは、ハンガリー協会の大会実行委員長から運営上の不備を詫びたり、温かい挨拶があった。(日本の我々代表にハンガリー協会の方がジンのショットグラスをご馳走していただいた。どんどん勧めてくるので、適量なところでご辞退申し上げた。)

団体戦・ベストリフターの表彰で盛り上がり、その後各国入り混じっての記念撮影、最大音響のディスコタイムなど会場は最高潮に沸き立った！

日本人選手たちも臆することなく、積極的にダンスの輪に飛び



写真上：団長と
した何かとお世
話になった三浦
重則先生

写真下：国士館
高校の吉村選手
(左) と、豊川
高校の坂口選手
(右)

こみ、楽しそうに友好を深めていた。

帰りのバスが来ると、意外とけじめ良く会場を後にした。(次の日は早朝にホテルを後にし、観光に出発だから)

最終日はブダペストの町を観光で、綺麗な街並み・マーチャーシュ聖堂・漁夫の砦・パーティー通りを散策、夕食後は国会議事堂、くさり橋、小高い丘の上から見るドナウ川とその周りは本当に驚嘆してしまうほど美すぎる！

若い選手たちは口々に「やばい！やばい！」を連発していた！(いい思い出になっているようで、こっちまで嬉しくなってくる。)



写真下：サブジュニア 120kg 級で、スクワット 365kg の世界新記録に成功したマイケル選手

写真上：国士舘高校の吉村選手（左）とマイケル選手（右）

大会全日程は、ほとんど疲れたが、最後に最高のご褒美で最高の締めくくりになった！
選手たちも三浦団長の話に耳を傾け、最後まで気を抜かずによく纏まってくれたと思う。

団長三浦先生、副団長藤野先生、阿南 JPA 技術委員長、松谷先生、添乗員の林さん、本当にお世話になりました。

また、付添で来られた保護者・ご家族の皆様、長い期間中、ご協力を賜り誠にありがとうございました。

大変素晴らしい世界大会遠征になったと思います。

選手の皆さんもこの経験を生かし、これからの目標に向かって頑張っていたきたいと思います。

私もまた、この感動を味わうべく、参加したいと存じます。
皆様、本当にありがとうございました。



写真上：DVD を販売するハンガリーデ
スク

写真中：国会議事堂

写真下：日本選手団ご褒美、ブタペスト
観光

